

保育現場における木育の実践と意識に関する研究

Research on the Practice and Awareness of Wood Education in Childcare Settings

青 木 信 子 林 韓 燮

Nobuko Aoki Hanseop Yim

(要 約)

本研究では、将来的に教育効果の高い木育プログラムの開発・提示することを目的としており、その前段階として、現職保育者を対象に、保育現場における木育の認識と実施状況について把握するための調査を実施した。その結果、木育活動は子どもたちにとって良い効果をもたらすと考えられており、回答者の半数以上が木育活動の実施経験があった。一方で実践方法や実践内容がわからないとの回答も見受けられた。木育活動が浸透していくためには、手軽に依頼できる専門家を紹介することや、具体的な実践方法や実践内容を提示することが求められていることが示唆された。

(キーワード)

木育、自然環境、幼児教育、教育プログラム

1. はじめに

近年、エコへの意識が高まり、自然環境を守るための取り組みが広がりつつある。日本は世界の中でも自然豊かな国であるが、人口密度の高さや国土開発により、自然環境は気候変動に大きく影響され、人間社会にも左右されている。

生態系における開発や乱獲による種の減少・絶滅、また生息・生育地の減少が危機的状況として挙げられている。また、里山などの手入れ不足による自然の質の低下である。特に国内の里山資源が利用されなくなり、放置されることも指摘されている（2023、朝日新聞）。このように里山の放置や手入れができなくなり、野生動物は人里や街中に出現することや、農林業はもちろん人の暮らしへの悪影響を与えることになる。このことから里山資源の有効活動をするための方策を検討しなければならない。

その方策の一つとして、「野外を中心に、地域の自然を活用し体験活動を取り入れた保育や幼児教育」を「野外体験保育」と定義し、普及を進める（2021、三重県）ことが挙げられる。主なる活動として「木育」活動があり、この「木育」は、誰もが「木とふれあい、木に学び、木と生きる」という取り組みである（2004、北海道）。子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心が育まれるなど、子どもに与える影響は大きい。これらの自然を介した教育活動は、自然とのふれあいが減っている現代社会の子どもたちには欠かせないものであり、2018年に改定された保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型こども園教育・保育要領の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に「自然との関わり・生命尊重」の項目が記載されたことで、さらに注目され見直されるようになった。また、幼児を対象とした「木育」活動は、活動の内容によっては幼児の発達特性上複数人数での取り組みが望ましく、必要な場合は、大人と取り組むことで子どもへの支援が

でき、より良い関係性を促す支援にもつながるなど、立派な教育活動になると考えられる。しかしながら、「自然を活用したプロジェクト」が注目され普及されているものの、保育・幼児教育分野においてはその専門的な活動を実施することが難しく、担い手が少ない現状がある。

なお、本研究の主旨を明確にするために、持続可能な社会をつくるための目標（SDGs）にも着目した。我々が今なすべきミッションであり、保育・幼児教育分野、特に木育活動を中心とする本研究で取り組むべき目標は「SDGs15」を意識することである。SDGs15「陸の豊かさを守ろう」とは、海洋を除く自然環境に関する多くの問題（陸域生態系の破壊や森林伐採の進行など）を背景に掲げられた目標である（2015、UN）。今、私たちが教育現場においてできることについて模索する必要があると考える。

また、日本は木材や食材など、様々な資源に至るまで、輸入に頼っている。このことは人々が日常的に使うものを自然環境に配慮したものに变化させることで、世界の自然環境破壊を軽減できるということになる。例えば、教育現場における学習活動には、里山資源を取り入れた実体験活動を行うことができると考えられる。

このような自然環境の認識を高めて行くために、自然環境を考えるきっかけづくりが大切であり、自然体験活動、特に木育活動を中心とした活動を推奨することが本研究の最終目的である。

本研究は、教育効果の高い木育プログラムの開発・提示することを目標にしており、前段階として保育現場に従事する現職保育者を対象に保育現場における木育の認識と実施状況を把握するための調査を実施する。

2. 調査方法

- （1）研究目的：保育現場における木育に対する認識と実施状況を把握し、その意識や課題を探る。
- （2）調査期間：2023年12月～2024年1月
- （3）調査対象：三重県内の公立・私立の幼稚園（所）、保育園、認定こども園、幼保一体化園の544施設
- （4）調査内容：属性、木のイメージ、木育の認知、園での木育活動の実施状況や内容、木育活動への意欲等18項目
- （5）調査方法：対象者に調査用紙を郵送し、同封の返信用封筒にて回答を返送する方法と依頼書にある二次元コードをスマートフォンに読み取り回答する自記式解答である。
- （6）分析方法：単純集計及びt検定・一元配置分散分析を行った。
- （7）倫理的配慮：書面にて研究の主旨と、回答を郵送あるいは返信することで調査に同意したとすることを説明した。また、調査結果はすべて機械的に統計処理を行い、個人や園が特定されないことも記載の上実施した。なお、本研究は高田短期大学倫理委員会の審査において了承を得ている（高短研審第24-9号）。

3. 結果

アンケート調査では、三重県内の公立・私立の幼稚園、保育園（所）、認定こども園、幼保一体化園

の 544 施設の中、252 の施設からの回答が得られた。性別は男性が 10.3%、女性が 89.7%である。年齢は 50 代が最も多い 51.6%であり、職位が園長と回答された件数は 179 名、20 年以上の保育経験があると答えた人数と同一であるため、20 年以上の保育経験があると回答者は役職が園長であるとうかがえる。

また、運営母体は私立が 50.4%、公立が 49.6%である。なお、園のタイプは、保育園（所）が 54.4%幼稚園 22.2%、認定こども園 20.2%の順である。アンケート回答者の基本属性は表 1 に示す。

また、園の所在地は北勢が 47.2%で最も多く、中勢が 32.9%、南勢が 8.3%、伊賀が 7.5%、東紀州が 4.0%の順である。回答者が勤務している園の園児数は、200 人以上が 6.4%、150 人～200 人未満が 11.1%、100 人～150 人未満が 29.9%、50 人～100 人未満が 25.0%、50 人未満が 27.5%と確認された。

次に木のイメージに関しては自由記述式で回答を求めたところ、「身近・地域の産物」「変化する」「五感を刺激」「健康的」「柔らかい・感触がいい」「安全」「包容力」「色が剥げやすい・劣化する」「生命力」「自然」「優しい」「癒し・リラックス」「香り」「様々な体験ができる資源」「あたたかい・ぬくもり」という 15 のキーワードを抽出することができた。回答によっては、複数のカテゴリーにまたがる記述が見られた。また、「あたたかい・ぬくもり」が最も多く（63.1%）で過半数であり、次いで「癒し・リラックス」（27.4%）「自然」（22.2%）が多かった。また、ほとんどがプラスのイメージを持っている中で、「色が剥げやすい・劣化する」というマイナスのイメージもわずかではあるが挙げられていた（図 1）。

表 1 基本属性

項目	区分	n	%
性別	男	26	10.3%
	女	226	89.7%
年齢	20 代	14	5.6%
	30 代	22	8.7%
	40 代	44	17.5%
	50 代	130	51.6%
	60 代	42	16.7%
保育経験年数	～10 年未満	37	14.7%
	10 年～20 年未満	36	14.3%
	20 年～	179	71.0%
園のタイプ	保育園（所）	137	54.4%
	幼稚園	56	22.2%
	認定こども園	51	20.2%
	その他	8	4.2%

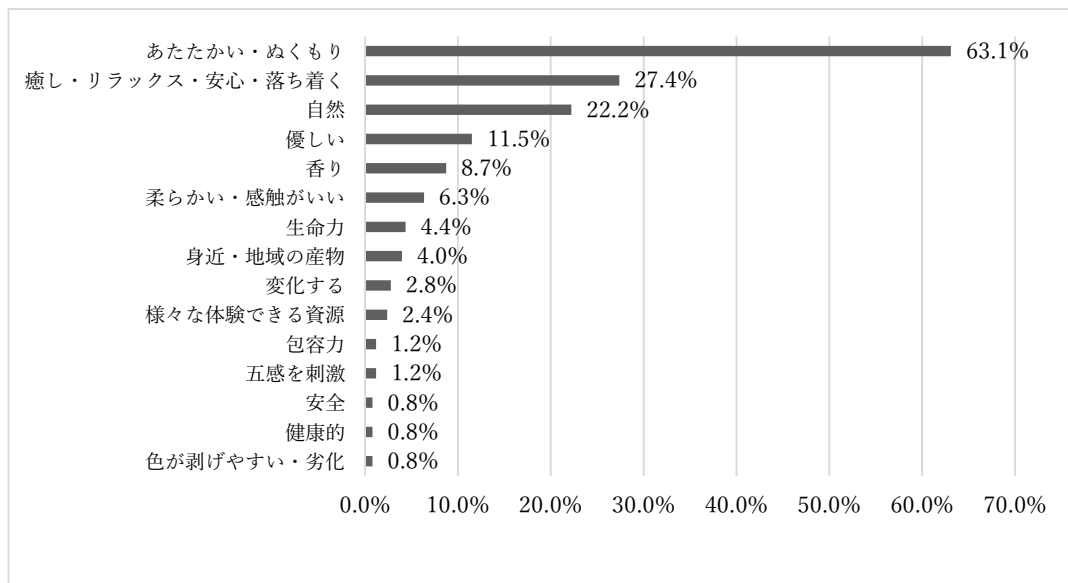


図 1 木のイメージ (n=252)

次に、「地域の木材を利用について」は、「とても利用したい」44.0%と「まあまあ利用したい」43.3%を合わせて87.3%の結果となった。「どちらともいえない」が12.7%であることから、ほとんどの回答者が地域の木材使用について肯定的回答であることがうかがえる（図2）。

「木育の認知度について」は、「よく知っている」「まあまあ知っている」「聞いたことがある」を合わせると56.4%の結果となり、「全く知らない」は8.7%で1割に満たなかった（図3）。

また、木育を知ったきっかけは雑誌や書籍が24件で最も多く、次に研修会が22件、本アンケートが21件、他の園・地域の情報が18件、園の活動が15件の順の結果であった。その他にメディア・ネット、園の木質化、教材や遊具関連などもみられた。さらに、運営母体が公立か私立かによって「木育の認知度について」に差があるかどうかをみるためにt検定を行ったところ、有意差がみられた（ $t=2.682$, $df=205$, $p<.01$ ）（表2）。すなわち、運営母体が公立園の方が私立園よりも、「木育の認知度について」が高い傾向にあるといえる。

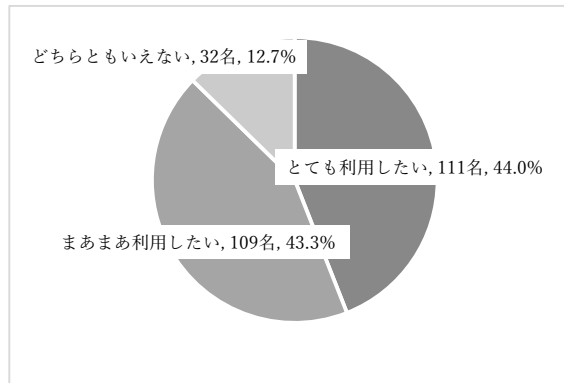


図2 地域の木材を利用について (n=252)

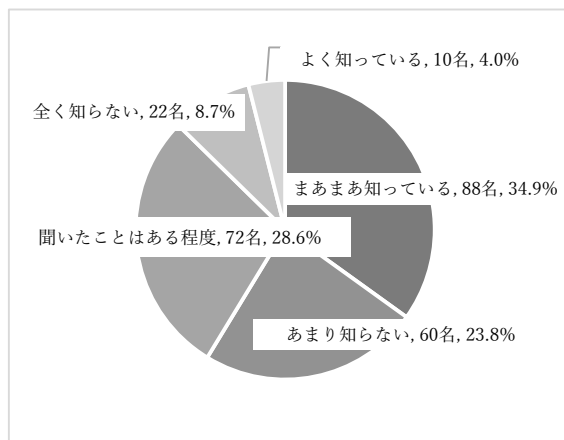


図3 木育の認知度について (n=252)

表2 運営母体と「木育の認知度について」の関連

項目	公立 (n=125)		私立 (n=127)		t 値
	平均	標準誤差	平均	標準誤差	
木育の認知度について (1: 全く知らない～5: 良く知っている)	3.19	0.92	2.84	1.14	2.682**

** $p<.01$

また、現在勤めている保育園（所）または幼稚園で園児を対象にした「木育」活動をしたことがあるかを尋ねたところ、半数以上の55.2%が「ある」と答えた。どのような木育活動を実施したかをしたかについては、木製おもちゃ導入が108件で最も多く、次に木材を素材にした活動が61件、園舎の木質化が36件、森林観察が30件、専門家による自然教育が29件の順の回答があった。その他に間伐材のつみきや木登りなどの回答もみられた（図4）。

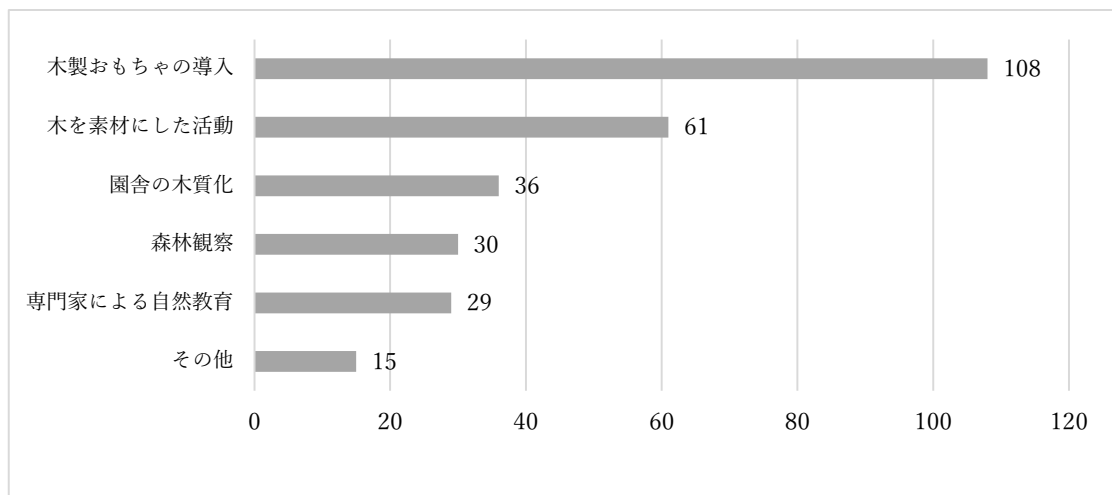


図 4 実施した木育活動の内容

一方で、「木育活動をしたことがない理由」を尋ねたところ、「木育活動を知らなかった」が 52 件で最も多くあった。次に「木育は知っていたが、実践方法がわからなかった」と「木育は知っていたが、実践内容がわからなかった」を合わせて 60 件ものぼる結果となった。さらに、「木育は知っていたが、保育の業務量が多かったため」が 16 件と「他の保育に力を入れているため」が 10 件、「その他」が 8 件の結果であった（図 5）。

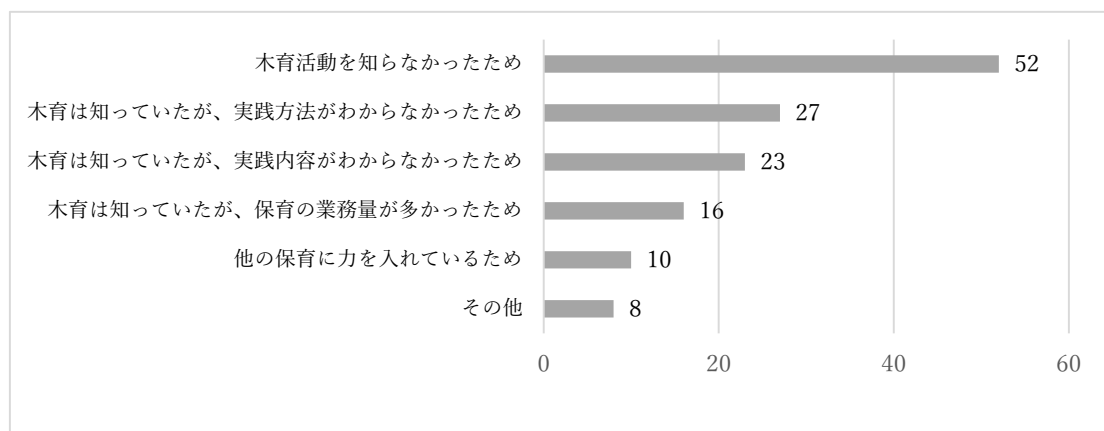


図 5 「木育」活動をしたことがない理由について

また、「今後、園児を対象に木育活動を取り入れたいか」については、「とても積極的に取り入れたい」25.4%と「まあまあ取り入れたい」47.2%を合わせて 72.6%の結果であり、木育活動への意識が高いことが確認された（図 6）。

どのような木育活動を取り入れたいかを自由記述式で尋ねた結果、252 件の回答があった。その結果を「実施した木育活動の内容（図 3）」と同じ「自然観察」「木を素材にした活動」「木

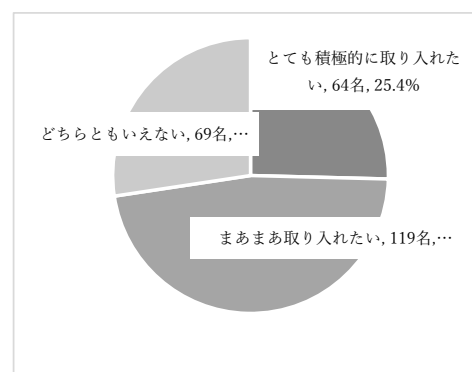


図 6 木育の導入意思について（n=252）

製おもちゃの導入」「専門家による自然教育」「園舎の木質化」「その他」の6つの項目に分類してまとめた（図7）。

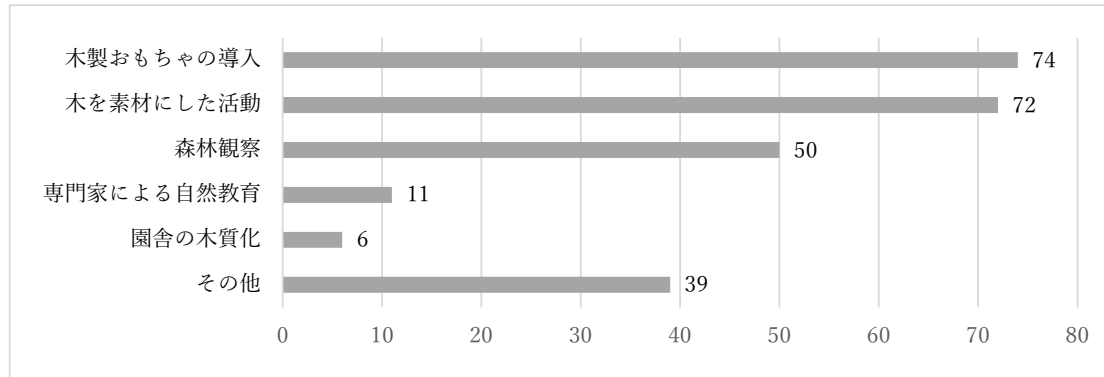


図7 取り入れたい木育活動について

多い順に「木製おもちゃの導入」「木を素材にした活動」「森林観察」であった。「木製おもちゃ」は積みなどの小さなものから園庭の遊具などの大きな物まで幅広く記述されている中、「木を素材にした活動」は自然物を材料にする活動はもちろん、釘や金づちを使う経験をさせたいという内容も何件もあった。なお、「森林観察」は自然の中に身を置いて自然を感じてほしいという保育者の思いが感じられた。「その他」39件を詳しく見てみると「何かしら取り入れたいが何が良いかわからない」（6件）「子どもたちが触れられるもの」（9件）「日常では経験できないもの」（3件）など、「その他」の約半数は具体的な活動内容は記述されていなかった。

次に、「木育活動の内容や方法を知る機会があれば積極的に取り入れたいか」については、「とてもそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせて79.6%でとても肯定的回答が得られた（図8）。

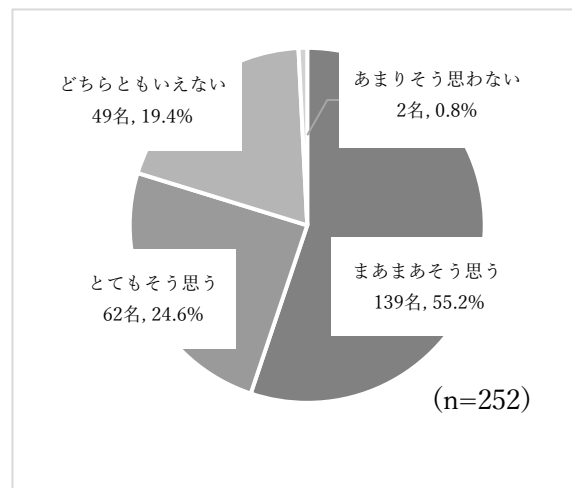


図8 機会があれば積極的に取り入れたいかについて

木育活動の有無によって「木育活動を取り入れたいか」に差があるかどうかをみるためにt検定を行ったところ、有意差がみられた（ $t=6.578$ 、 $df=250$ 、 $p<.001$ ）（表3）。すなわち、木育活動をしたことがある場合が、ない場合よりも、木育活動を取り入れたいと思っていると解釈することができる。

表3 木育活動の有無と「木育活動を取り入れたいか」の関連

項目	木育経験あり (n=139)		木育経験なし (n=113)		t 値
	平均	標準誤差	平均	標準誤差	
木育活動を取り入れたいか (1: 全くそう思わない～5: とてもそう思う)	4.27	0.59	3.74	0.69	6.578***

***p<.01

さらに、「木育についての認知度」の3グループ「木育を知っている」「木育を聞いたことがある」「木育を知らない」によって「木育活動を取り入れたいか」に差があるかどうかをみるために一元配置分散分析を行った。その結果、「木育についての認知度」の3グループと「木育活動を取り入れたいか」には有意差がみられた ($F=10.865$, $df=2, 249$, $p<.001$) (表4)。この結果を踏まえて Games-Howell 法により多重比較を行ったところ、「木育を知っている」グループと「木育を聞いたことがある」グループの間に1%の水準で、「木育を知らない」グループの間に0.1%の水準で有意差がみられた。すなわち、「木育を知っている」グループが「木育を聞いたことがある」と「木育を知らない」グループよりも、木育活動を取り入れたいと思っていることがいえる。

表4 木育についての認知度と「木育活動を取り入れたいか」の関連

項目	木育を知っている a (n=98)		木育を聞いたことがある b (n=72)		木育を知らない c (n=82)		F 値	多重比較
	平均	標準誤差	平均	標準誤差	平均	標準誤差		
木育活動を取り入れたいか (1: 全くそう思わない～5: とてもそう思う)	4.28	0.61	3.93	0.61	3.84	0.76	10.865***	a > b・c

***p<.001

4. 考察

本章では調査結果に基づき、「保育現場の実情について」「保育現場における木育の認知度」「自然環境教育について」の3つの視点から考察する。

(1) 保育現場の実情について

木育活動をしたことがある園が半数以上、木育活動を取り入れたいと考えている園がおよそ4分の3を占めており、保育現場では何かしら木育活動に興味を持っているのがわかる。取り入れている内容も取り入れたいと思っている内容も両方とも最も多いのが「木製のおもちゃ」、次いで「木を使った活動」であった。木のイメージの問いでは、木は子どもたちにとってぬくもりや癒しを感じられるものであり、五感が刺激されるものであるという回答が多く、木を使った活動が子どもたちにもたらす効果は大きいと考えられていると捉えることができる。だからこそ、常に触れることができ、身近な環境といえる「木のおもちゃ」を取り入れる園が多いのではないだろうか。一方で「木を使った活動」については、「木のおもちゃ」の占める数まで及ばなかった。その理由として、何か活動を行おうと思うと、保育の業務の忙しさやその園の保育方針によっては、取り入れる時間や気持ちのゆとりも影響するからではないだろうか。木育活動が計画や準備等に時間がかかり、スキルも必要な活動であるという印象を持っていることも推察される。また、「木育は知っていたが、実践方法や実践内容がわからなかった」という

回答があったり、木育活動を取り入れたいと考えていても具体的な活動内容までは記述されていなかったりなど、具体的な活動内容を考えるところまでは至ることが難しい点も示唆された。以上のことから、簡単に取り組むことができる木育活動を提示することで、より活動内容を知り、その幅が広がることにも繋がると考えることができる。

そして、木のイメージの中には、劣化や色が剥げやすいという維持の困難さも指摘されている。劣化をマイナスに捉えるのではなく、自然物の変化と捉え、そのおもしろさも教育効果として盛り込んだ実践プログラムを提供することも考えていきたい。

（２）保育現場における木育の認知度について

保育現場における木育の認知度については、「木育」という言葉を知っている現職の保育者が有効回答者 252 名のうち 88 名が知っていることから、木育の認知度が高いといえない。そうした中で、木育活動を実践している保育現場が半数以上であることから、保育者自身が木育という言葉を知らなくても、市町村の政策や園の方針により、様々な取り組みの中、一定数の木育活動が行われている傾向があるといえる。

また、調査結果を公立園と私立園を比較したところ、公立園が木育に関する認知度が高いことが確認された。この結果からは、公立園を管轄する市町村による情報交換や研修会、園の交流会などの機会が多いことが考えられる。

また、「専門家による自然教育」というキーワードや、74.6%が「木育活動の内容や方法を知る機会があれば積極的に取り入れたい」という回答が得られたことから確認される。このことは前述したように木育活動は、木工活動のように一定のスキルや専門的知識が必要とされる傾向にあると考えられる。

筆者を含む多くの団体や市町村が木育普及の力を入れており、木育活動を意識して活発に取り組んでいる保育現場も増えつつある。

一方で、保育者養成校における教育課程の中で木育プログラムに関する内容は、一部の研究からのみ報告されており、教育カリキュラムとしての木育プログラムは数少ないことが現状である。もし、保育者養成校での木育という概念が教育課程に入ることにより、木育の認識が広く伝わりやすくなると考えられる。それが可能であれば保育現場において木育活動は、遊びの一つとして捉えやすくなるのではないだろうか。

（３）自然環境教育について

多くの保育者は地域の資源を有効活用することへの意識が高いことが確認された。特に取り入れたい木育活動として「木製おもちゃの導入」「木を素材にした活動」「森林観察」の順位に挙げられ、園生活や日頃の生活の中で木材を含む自然物とかかわる機会を増やしていきたいということがいえる。さらに、地域資源を活かして、自ら活動に取り組むことで、地域と資源へ、つまり自然環境への愛着が生まれると同時に木育活動の範囲が広がると考えられる。

木育活動は自然体験活動の一つであるため、自然環境について考えるきっかけづくりにつながると期

待できる。

以上のことを踏まえてみると、木育活動は、森にふれ、木を使い、森の環境を保護し、森とつながるような活動を展開することで、子どもが成長しながら「自然を思いやる心」や「自然とともに生きる力」が育ち、大人になった時に、自然環境への意識が高まると期待できる。

実際に木育活動を取り入れたことがある現場が半数以上であることが確認され、木育の重要性は高いことがうかがえる。また、木育活動を取り入れた経験がなくても内容や方法を知る機会があれば、積極的に取り入れたいという意見があった。さらに、木育活動をしたことがある保育者はしたことがない保育者より、木育活動を取り入れたいという傾向が高いことが確認され、多くの保育者は、子どもが自然や木を身近にすることは子どもの成長や発達にいい影響があると認識していることがうかがえた。

このことは、木が持っている「あたたかい・ぬくもり」「癒し・リラックス」「自然」などの肯定的イメージがあった。ほとんどのひとは日頃の生活の中で、木や森林に対して親しみを持っており、「木育」そのものが自然を連想させると考えられる。

さらに、木の「あたたかい・ぬくもり」というイメージは、「やさしい」という言葉と関連しており、人に対する人情すら感じさせるとキーワードである。これこそが、教育効果の一つだと考えている。なぜならば、教育は人と人が向き合って、物事について語り合うことで人格形成への良い影響があると判断しており、教育する中で最も優先する必要があると考えているからである。

5. まとめと今後について

本研究では、将来的に教育効果の高い木育実践プログラムの開発・提示するために、保育現場における木育認識と実施状況を把握することを目的とし、現職保育者を対象に調査を実施した。その結果、木育活動を実施したことのある園は半数以上、実施したことはないが実施したいと考えている園はおよそ4分の3を占めており、木育活動は子どもたちにとって良い効果をもたらすと考えていることが明らかになった。しかしながら、木育は知っていたが、実践方法や実践内容がわからないとの回答が60件あり、実践方法や実践内容を具体的に提示されることが望まれているのではないかと推察される。

「木育」活動の内容にこだわり過ぎるとハードルが高く、自然に触れることが子どもたちにとって良い影響をもたらすとわかっていても取り組むことに抵抗を示してしまうことも考えられる。まずは、自然物で遊んだり生活環境に自然物を取り入れたりすることが「木育」活動の第1歩であるということを伝えていきたい。また、興味があるが、子どもたちにどのような内容をどのように投げかけていくのかわからないという園には教育効果があり簡単に実践できるようなプログラムを提示していくことも考えている。その上で、自然環境の認識を高めていくことにつなげていきたい。

【参考・引用文献】

永石文明. “生態系とは？ 役割と現状、生態系保護に関するSDGs目標や事例を紹介”. 朝日新聞デジタル. 2023-08-02.

<https://www.asahi.com/sdgs/article/14957779>, (参照 2024-4-10).

“野外体験保育普及啓発事業” . 三重県. 2021-04-06.

<https://www.pref.mie.lg.jp/D1KODOMO/000188600.htm>, (参照 2024-4-10).

“北海道の『木育（もくいく）』～『木育』とは” . 北海道. 2024-02-05.

https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/sky/mokuiku/toha_frame.html (参照 2024-4-10) .

“Goal 15 | Department of Economic and Social Affairs” .UN.2015.

<https://sdgs.un.org/goals/goal15> (参照 : 2024-12-12) .

文部科学省・厚生労働省・内閣府(2017)〈平成 29 年告示〉幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定
こども園教育保育要領.